

=====

ふくしま

2015. 3. 18

復興支援フォーラムニュース No. 89

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 (tkonno67@gmail.com)

=====

第86回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等

第86回ふくしま復興支援フォーラムを、2015年2月26日に開催しました。

星野仁彦氏（福島学院大学大学院教授／精神科医）から、「トラウマに弱い方々の理解と対応～大震災を中心として～」の報告を受けました。氷雨の中、22名の方々が参加しましたが、会場で提出された文書によるご意見等は、以下の通りです。

~~~~~

★ 深刻な話題も多かったが、先生自身の明るいキャラクターに助けられた面が大きかった。様々な心の問題への対処について、そもそも心の病気や障害について語ること、知ること自体のタブー感、敬遠があり、悪循環になっているように思う。理解の土壌づくりをどう進めていくのか。(D.Y)

★ EMDRが、プレッシャーがかかるビジネスの場でも使えるのではないかと思います。(K.A)

★ 「心のケア」のあり方に関して、詳しく、解りやすく後援していただきまして感謝申し上げます。(K.F)

★ これから精神科の専門やカウンセラーの必要性が増大するであろうことは、よくわかりました。さらに地方公務員や学校の先生、そして専門ではない一般医のところでも、取り組むべきと思いました。(J.M)

★ 精神的な病気への対応について、病気でない人が対応することの難しさについて学べた。病気と性格の違いは、特に見きわめが難しいのかとも思った。(S.N)

★ PTSDに向き合うことへの、精神科医や心理士、カウンセラーさんの専門的立場が分かりやすかったです。機能不全家族については、自分の身近にもみられます。医療、福祉、看護分野で、福島県が今後充実できるような取り組みができることを望みます。(M.S)

★ 今回の話を聞いて、平時から考えていかなければならない問題と思いました。是非、多くの方々に知って欲しい内容でした。(Y.I)

★ 震災に関連したケアの問題が乏しく、講演の題意に沿っていないと感じた。講演で扱ったテーマが幅広過ぎたため、かえって内容が分かりにくかった。震災に特化した解説が少なく、収穫も少なかった。(J.O)

★ 震災弱者としての精神的な病をもつ方々の、震災時に特に悪化する状況を詳しく聞いた。身体障害者や要介護者等は、震災時の対応が問題となりやすいが、精神疾患の方々への対応が難しいと感じた。そのため、特に震災時に手つかずで悪化していると思った。精神疾患に対する市民の理解が不十分（偏見）であること、平常時でもその医療体制や支援体制の弱さが、震災等の異常時での対応の遅れをもたらしていると思った。避難の長期化・展望の見えない生活による自殺や精神疾患患者の増大を危惧している。「心の復興」は、「人間の生活の復興」の、重要な柱と思っています。(T.K)

## ふくしま復興フォーラム

## OECD 東北スクールの実践と若者たち

福島大学 三浦浩喜 (OECD 東北スクール統括責任者)

## 1. 震災から見えてくる日本の学校の可能性

- (1) 東日本大震災、原発事故により、多くの学校関係者が既存の教育のあり方に疑問
- (2) 「教育とは何なのか、本気で考えた」校長、現場教員
- (3) 「命を守る砦」として機能した学校と教師のがんばり、一時的に学校に空いた風穴、本来の学校の姿が出現
- (4) 地域に「安定性」を提供する象徴的機能
- (5) 教育と福祉の結び目としての学校

## 2. 「復旧ではなく、復興」?

- (1) 「標準法」を金科玉条とする教育行政、兼務教員等による教育現場の大混乱
- (2) すさまじいスピードで「復旧」させようとする教育行政、学校統廃合のチャンス?
- (3) 放射能の安全性評価をめぐる、厳しく対立する福島県民 そして沈黙 無気力化

「復旧・復興」の陰においていかれる子どもたち

## 復興教育の4つの立場



## 3. 教育復興プロジェクトとしての OECD 東北スクール

- (1) 大震災・原発事故の最中に見えた可能性—教師・子どもが共に学び合う 学校を超える
- (2) 震災のみならず、東北のハンディキャップ、人口減少や環境問題、エネルギー問題も含めた、大きな課題を含めた「世直し」の教育へ
- (3) 震災に襲われた東北から新しい教育を生み出す—プロジェクト学習、教育改革モデル

1000年に1度の教育改革の可能性

## 4. OECD 東北スクール、スタート (2012/3/26)

- (1) 2012年3月(震災から1年後)岩手、宮城、福島の被災地から70人の中学生と10人の高校生が集合
- (2) 「何とか自分のふるさとを取り戻したい」と考える中高生たち
- (3) しかし、あまりに短い準備期間のために、参加者の目標意識はバラバラ「参加したらパリに行ける」?
- (4) 「異種格闘技」の2年半のスタート

## 授業をしながら教室を造る学校

### 5. OECD から与えられた Mission

2014年、パリから世界に向けて東北の魅力をアピールせよ

- ・パリなんか行ったことない、言葉もわからない
- ・誰と何をやればいいのか？
- ・東北の魅力って何？
- ・世界に向けてって、どうやって人集めるの？
- ・どうやってアピールするの？
- ・どこでやるの？ いくらかかるの？ ……

「解のない問題」に取り組む生徒・教師



### 6. OECD 東北スクールの活動

参加生徒は、福島・宮城・岩手に加え、東京・奈良の生徒、計84名。

- ① 集中スクール……2年半で5回のワークショップ合宿（4～5日）で、多彩な講師による講義、体験活動や熟議を行う
- ② 地域スクール……各地の状況に応じて、日常的に、若者の視点による地域復興を企画・実行する
- ③ テーマ別活動……パリエントを成功させるために「シナリオ」「産官学連携」「コミュニケーション・PR」「セルフドキュメンタリー」の各活動を行う

### 7. チーム「環WA」の誕生（2012/3/26）

「自分たちが一番たいへん、と思っていたら他の地域の人話を聞いて、自分たちよりたいへんな経験をしていてがんばっているのを見て、自分ももっとがんばらなければ、と思った。」

- ① 被災3県の異なる背景を超え、被災地外の生徒も含めて一体となる
- ② チームを「環WA」と命名
- ③ チームのキャッチコピーは、「過去を超えます。常識を超えます。国境を超えます。」

### 8. OECD 東北スクールがめざしたもの

- (1) 東日本大震災からの復興の担い手を育てる
- (2) 産官学のネットワークによる教育システムをつくる
- (3) 生徒の創造性や主体性をのばすプロジェクト学習を開発する
  - ① 地域や国外にまたがる地域間交流
  - ② 生徒・大人の双方が学びあう・多様性
  - ③ 2年半の長期的取り組み・プロセス重視
- (4) 被災地からエビデンスベースの教育改革モデルを発信する

## 9. OECD 東北スクールのプレイヤー（総勢約300人）

- ① 福島大学運営事務局（専任スタッフ）
- ② 生徒（3 県+東京・奈良 84 名、支援者）
- ③ ローカルリーダー（LL、引率教員、NPO）
- ④ エンパワーメントパートナー（EP、協力者、企業、NPO、個人、学校、その他）
- ⑤ 政府関係者（文科省、外務省、観光庁、農水省……）
- ⑥ 教育行政（県教委、地教委、学校……）
- ⑦ パリ側協力者（OECD 日本政府代表部、パリ市当局、OECD）
- ⑧ 委託業者（イベント、ディスプレイ……）
- ⑨ アドバイザリーボード（学識経験者、各界から）

## 10. 産官学連携活動（資金調達活動）

県・地域への協力依頼／街頭での募金活動／企業へのプレゼンテーション／クラウドファンディング／チャリティオークションなどを展開 経済的自立も重要な目的

調達額によってイベント規模を決定→資金がないのでイベントが決められない→イベントが決まらなると資金が調達できない→デッドロックとのたたかい

## 11. OECD Forum（2014/5/5～6）

テーマは「レジリエンス Resilience（粘り腰、回復力、跳ね返り）」

2名の生徒が OECD に招待され、セッションで発言 大喝采を浴びる

- 震災を機に牡蠣の養殖方法を改善 →震災前よりもいいものに作り替えること
- 被災者の自立こそが一番の復興

## 12. OECD 東北スクールの光と影

生徒の成長、教師の変化

「画期的な教育活動」と評価される一方で…

…

資金調達の遅れ／イベント決定の遅れ／離脱する生徒／地域間の温度差／情報の混乱と誤解／パリ側との意思疎通のズレ／……

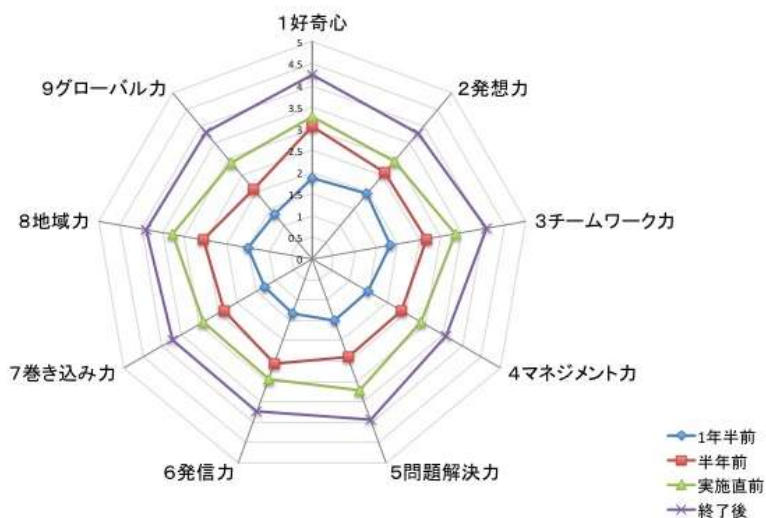
イベントの危機！



## 13. 東北復幸祭〈環WA〉in PARIS

→ビデオで

## 14. プロジェクトの成果



失敗と成功を積み重ねて、課題を解決するだけでなく、現状を理解し、何が課題かを自ら発見することができるようになった。

このスクールには様々な世代、地域、職業を持った人たちがたくさんいる。……そのおかげで、新たな発見、新しい発想も生まれた。

日本の子ども達に義務教育ではできないような新しい学びを与えられる人になりたい。

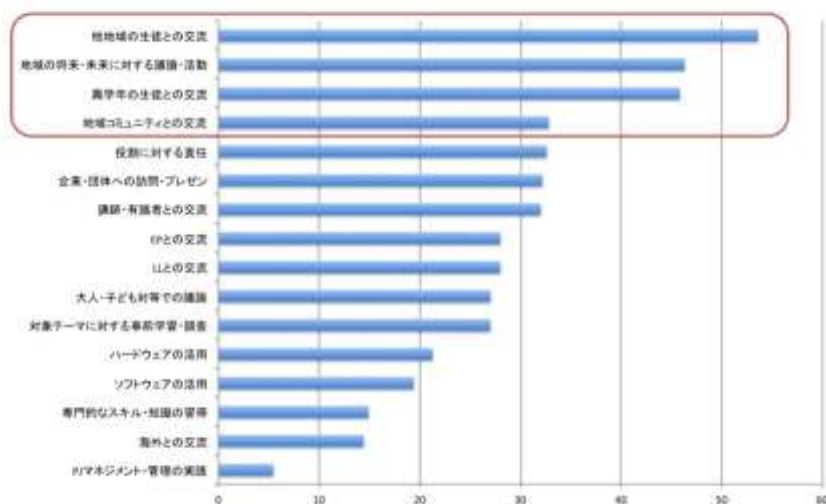
● 現実から出発し、センチメンタルにならないこと。そこに本当の希望が生まれる。

● 子どもたちの問題は、大人の生活が安定すれば自ずと収束するという「従属した問題」ではない。子どもたちの問題は独自の問題・課題をはらんでいる。

● 大人の引いた境界線(県と県、大人と子ども、被災者と非被災者……)を、生徒達は飛び越え、新しい価値をつくる。

● 子どもたち自身の世界をつくっていくこと。子どもたちの文化をつくり、自立するための苗床をつくること。

## 成長の要因



※ <http://oecdtohokuschool.sub.jp/report.html> より資料をダウンロードすることができます。

~~~~~  
【予告】第88回フォーラム 2015年3月26日（木）18:30～20:30

「原発事故と予防衛生」

報告者：田中 正敏 氏（福島県立医大名誉教授）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1
~~~~~

【予告】第89回フォーラム 2015年4月8日（水）18:30～20:30

「よりそいホットライン1千400万件のアクセス分析が示す被災地の今と日本の今」

報告者：熊坂 義裕 氏（社社会的包摂サポートセンター 代表理事）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室3  
~~~~~

【予告】第90回フォーラム 2015年4月23日（木）18:30～20:30

「双葉郡の小中学校の『ふるさと創造学』—避難校に広がる総合学習の試み」

報告者：中村 秀夫 氏（ジャーナリスト）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1
~~~~~

【予告】第91回フォーラム 2015年5月14日（木）18:30～20:30

「生協組合員（住民）目線での被ばく調査について」

報告者：野中俊吉 氏（生活協同組合コープふくしま専務理事）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」視聴覚室  
~~~~~